
世界の終わりのその先に。

空々*

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の終わりのその先に。

【Nコード】

N3079D

【作者名】

空々*

【あらすじ】

何も変わっていないように見えて、世界は少しずつ終わっていく。世界の終焉で、ハーヴェイは待っていてくれるかな。また2人で手を繋いで歩くことは出来るのかな。・・・途切れることのない線路の上を。果てしなく続く線路の上を、また2人で。

いつもの朝、キーリは太陽の光と、鳥の囁きとともに目を覚ます。
「うーん……」

いつも通り、大きく深呼吸して、背伸びしながらポーチに置かれた鉢植えたちの様子を見る。とは言っても、たった二つの鉢植えがあるだけで、後は一階に置いている。キーリは昨日、ハーブ屋を開店させたばかりだ。

今日も頑張るぞ、なんて独り言を言いながら、一階に下りて、朝食の支度をする。今日の朝ご飯は何にしようか……うーん……そうだ。卵があるからスクランブルエッグを作ろう。

その時、不意に赤銅色の長身瘦躯が現われる。

「あ。おはよう。今日はね、スクランブルエッグに……」

ふとキーリの声が途切れる。赤銅色の長身がふらりと揺れ、そのまま床に倒れた。

「ハーヴェイ……!!」

すぐに火を止め、駆け寄って抱き起こす。

「ハーヴェイ……ハーヴェイ……!!」

返事が無い。辛うじて呼吸はしているので多少安堵し、だが長身を揺さぶって必死に起こそうとする。ハーヴェイの目は尚も閉じたまま、まるで永遠に覚めることのないようだった。

キーリはハーヴェイを抱え、寝室まで運んでいった。抱えながらキーリは軽い、と思った。もちろんキーリより大分背の高い長身が軽いわけは無いのだが、それでもキーリには酷く軽く思えた。

前にもこうやってハーヴェイを抱えて歩いたことがある。その時は兵長も一緒に、ハーヴェイは五体満足では無かったけれどちゃんと生命力があつて……まるで程遠い過去のように思えた。その時の

ハーヴェイは重くて、本当に重くて。抱えるだけで精一杯だった。ふと左手に抱えているハーヴェイの手を見る。タダイの家に来て一年近く経つ今、ハーヴェイの容態も着々と悪化していた。肌はやせ衰え、顔はやつれ、手だつて見ていられない程にがりがりになった。

昔、いつもキーリに差し伸べていた、あの華奢でも骨ばつたごつごつした優しい手はもう無い。あるのは、がりがりに痩せ衰えた左手だけだ。

ハーヴェイをベッドに寝かせ、キーリは一息ついてからハーヴェイの顔を見た。もう永遠に目を覚ますことは無いかもしれない思った。…それでもいい。

ハーヴェイはもう十分頑張った。キーリが見ていられない程に。目的を達成した後も尚、ハーヴェイはキーリと一緒にいてくれた。一緒にいたいと願って、頑張ってくれた。キーリにとってはそれだけで十分だった。

だから、ハーヴェイ…もう頑張らないでいいよ。楽になっていい心の底からそう思えた。もうキーリ一人で大丈夫だから。

その時、自然と両手で握っていたハーヴェイの左手に少しだが反応があった。

「ハーヴェイ…？」

キーリはハーヴェイの今にも折れそうな左手を優しく握り返し、ハーヴェイの顔を見た。もう永遠に覚ますことの無いとさえ思った。瞼が、薄っすらと開いた。

「…キーリ…」

懐かしい、本当に懐かしい声だった。弱々しくて掠れた、蚊の鳴くような、本当に小さな声だった。一年ぶりに聞く、ノイズの混じった喉の辺りでごろつく声。もう脳は完全に腐敗しきって、声の出し方だつて覚えているはずなのに。

「何？ハーヴェイ」

キーリはハーヴェイの頬に触れ、子供をあやすみたいに優しく問う。

「…り…が…と…」

ハーヴェイはそれだけ言うと、少しだけ優しい笑みを浮かべ、静かに目を閉じた。

「……ハー…！」

キーリは言葉を切った。呼んじゃ、駄目だ。もう楽にしてあげるんだ。眠らせてあげるんだ。ハーヴェイの掌をきつく握り締め、溢れ出てくる感情を喉の奥に押し込めた。

数分が経った。ハーヴェイの手は、もう冷たくなっていた。

「私も…ありがとう。ハーヴェイ。」

キーリはそう呟いた。もう聞こえていないハーヴェイに。

ハーヴェイの左手をベッドの上に優しく置き、それからハーヴェイの顔を見た。それは安らかな、本当に安らかな表情だった。まるで眠っている子供のように。

… あれは十四歳の時だっただろうか。ハーヴェイと別れ、もう一度再会した時はハーヴェイはヨアヒムに核を奪われていて、何とか核を取り戻して、ハーヴェイに核を戻した時、私はこう呟いていた。

「これで元に戻らなかつたら、今度こそ死んじゃってもいいや。」

あの時は本気だった。ハーヴェイは私の全てで、私の存在そのもので。ハーヴェイがいなくなった世界なんて考えたくもなかったし、そうなった時は私はもう生きる意味を無くすんだろうと思っていた。でも今は違う。お母さんが産んでくれた命を、ハーヴェイがぼろぼろになつて守ってくれたこの命を、大切にしようと思う。

ハーヴェイはいなくなってしまうたけれど、私はハーブ屋を続けようと思う。常連さんが出てくるようになったらいいな。お客さんが、私が育てたハーブで、幸せになってくれたらいい。たまに>バス&スズイーズカフェ<や>ライブ&バー<に顔を見せに行ったり、できればどこかでシマンさんたちにも会いたいな。ナナにも会いたいし。

ハーヴェイのお墓はどこにたてよう。タダイさん達のお墓の近くにしよう。また昔みたいに仲良く話して欲しいな。喧嘩しちゃうかな・・・ピンポン。そんなことを考えていた時、不意に玄関のチャイムが鳴った。最近つけたばかりの、真新しいチャイムの音が窓から尋ね人を見てみる。一瞬誰だか分からなかったが、紺のスーツと、右手に色とりどりの花束を持っているという、律儀な格好をしたユリウスだった。きっと開店祝いに来てくれたんだろう。

「はい。今行く」

キーリは椅子から立ち上がった。そして、振り返ってキーリはもう一度だけハーヴェイの顔を見た。

「じゃあ行くね。ハーヴェイ。」

……ハーヴェイは当たり前前だけども言わなかった。

ハーヴェイの旅は終わってしまったけれど、私の旅はきっと地平線の向こうまで続いている。

私の旅が終わった時、またハーヴェイと出会えたらいいな。そして2人で手を繋いでまた、歩き出せたらいいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3079d/>

世界の終わりのその先に。

2010年10月8日15時51分発行